三高終焉のころ（2・4・21）

久米　直之（昭5・理甲）

◇　はじめに

久米でございます。前から井垣君に責められてをってそしてその都度逃げてゐたんでありますが、よく考へてみたら、井垣君の催促は毎月あるわけです。だから一度やったらあとやれと言はれへんやろと、思ひきって引き受けたのでありますが、さて今度は、どんなことを喋ったら良いかわからん。適当な持ち合はせもありませんので、自分に経験した中から、かういふ表題にしたんであります。ところが、これをだしてしまってから、ちょっと考へてみたら終戦後の大部分の三高生諸君は私と一緒に居ったわけでありまして、うっかりしたことは喋れない。喋ったのはいいが「あれ、先生ちごてまっせ。」と言はれた時にかへす言葉がない訳で、教室の講義ですと、困って立往生しても「この次までに調べとくわ」といふ手がある訳でありますけれども、一遍き

りの立往生となると困ったもんです。これはえらいことになったと思って、表題を出してしまってからまたちょっと困ったのですが、まあ、とにかく当って砕けろといふわけでお話をしようと考へた訳であります。

私は文明の利器が嫌ひでして、それでもう長年、四十何年間、或ひはもっとながいかもしれませんが、講義をしましたけれどもラウド・スピーカーといふものは使ったことがなかった。京都大学を退官しまして、その後、私立大学で喋らせてもらひました。私立大学といふところは学生が二百人から二百五十人もきます。さういふやうな時でも私は、せっかく週に一遍か二遍しかこれませんけれども学生と顔をあはすんだから、機械を通じてつくった声でもの言ふよりも、生の声で喋った方がいいと思ひまして、地声（ヂゴエ）でとほして参りました。ところがこの二年前、私八十をこしましたんで、私学出講を一切お断りしまして、家に閉じこもってゐますとだんだん声が衰へてまゐります。随って一時間かそこいらの間喋らしてもらふのはいいけれど、途中でダウンするかもしれない。ダウンしたらもうその場で手をあげてハイさよなら、と言ったらいいと肚をくくって今日、ここへ罷り出た訳であります。

今日は奥田会長や堀江大先輩など、えらい方々が居られまして、これまた今度はうっかりした事は喋れない。本当は私共が三高に居った時に新制施行に当って京都大学と色々やりとりをいたしました。その交渉については、私は京都大学に対して恨みをもってゐる。で、それも喋れると

いいんでありますが堀江先生がおられるとちょっと言へない。それで、これはまあ機会があればといふことにいたしたいと思ひます。

本当に今日は皆さんにこの天気の悪い日に来ていただきまして、誠に恐縮の至りであります。

私はもともとは秘書型であります。従って会議の場合などにはメモをとる癖があります。かういふ帳面を諸君はみたことがあって、これをみるとゾッとする人が居られると思ひますけれども、これはたまたまこの三高へ私が戻ってまゐりました時に生物の教室にこれが沢山あったんです。何も書いてないのが…。当時は物資不足で、帳面がないもんですからこれをたまたま使ひまして、かういふメモを、私が三高がなくなるまでの間にまあ七、八冊作ったんです。で、今日はここには諸君の成績ははいってをりませんので、どうぞ安んじて私におつきあひをいただきたいと思ひます。

◇ 着　任

私は昭和二十一年、終戦の翌年の四月から三高がなくなる二十五年の三月三十一日まで三高の教師を仰せつかりました。満四年であります。その間に卒業生を送りだすことざっと何人になりますか、三高の定員は、本来は文科百六十人、理科百六十人、計三百二十人であります。ですから生徒総数は千人にならない。で、普段は代返したりサボったりしてゐる生徒がをりますから学

校へ出て来るのは大体まあ六、七百人であったでせうが、戦争中には理科を沢山とったりしまして、その上、私が来ました頃にはもうそろそろ三高がなくなるといふことがわかりかけて居りまして、おいておく訳にいかんわけです。更に軍学徒や外地引揚学徒等が加はるなど、いろいろの理由で、三高生の総数は千名を大きく越える大世帯となってをりました。

多いといっても現在の私学のやうな多人数ではありませんから、皆さん顔も名前もよく知ってる人が多いわけでありますし、ま、なるべく固有名詞はださないやうにしてお話を申し上げたいと思って居ります。

私はこの戦争、終戦までちょうど満六年間仙台に居りました。東北帝国大学理学部の生物学教室といふところにをりました。昭和二十年の七月十日夜、仙台は大空襲をうけまして、京都でいひますと京都駅から今出川通まで、東は東山通から西大路までぐらいのところが殆ど全部丸焼けになったんであります。私はたまたまその時は卒業研究をやってゐる学生二人をつれて青森県の八甲田山にあります研究所へ行ってをりました。随って私はその仙台の大空襲を知らずにすんだのでありましたが、帰ってきてみると仙台は本当に焼け野が原で、どこが東かどこが西かわからんぐらゐでございました。

幸ひ東北帝大は一部を除いて無被害でしたが、下宿は丸焼け。私も相当落ち込んでをったのであります。その年のすなはち終戦の年の十月に珍しく石橋先生から手紙が参りました。先生は例

の唐紙の巻紙に無類の達筆で、内容はそんなに沢山ではないんですけれども大きな字で書いてあり、かなりぶ厚いものでありました。要するに結論は「お前は三高へ戻ってこい。」と、かういふ言ひ方で、命令形ではございませんでしたけれども先生の顔を思ひ出しますとこれはもう「帰ってこい」みたいな感じがしたんであります。私は三高へといふより、三高の陸上部へ入学しまして、石橋さんが陸上部長だったもんですから生物の教室へは時々お邪魔をする訳です。さうするとそこに一年の時植物の講義をしていただいた鈴木（チンクシャ）先生が居られましてお二人で、両先生共非常な煙草好きでありまして、その煙の中で、いい話も駄洒落もいろいろ聞かせていただきました。しかもその教室へ、その両先生の所へですね、河野与一先生であるとかあるひは中村直勝であるとか深瀬さんであるとか、あるひは一瀬雷信先生であるとか、それから若いところでは秋月・古松といったやうな、これはもう失礼ながら「さん」をつけんでもすむやうな先輩でありますが、それからその他に理学部の先輩で今西錦司とか、あるひは小野喜三郎とか、または芦田譲治といふやうなその当時は新進気鋭の学者がみえて居りまして、さういふ方の話を、それが全部一堂に揃ふといふわけではございませんけれども、時々誰がきたり彼がきたりといふことでございます。で、この教官室の空気といふものは非常に、この何といひますかアカデミックでありまして、非常にいい空気だったわけです。それでまあ私は、それにうたれたといひますか煙にまかれたといひますか、そして挙句のはてには、こんな所でしゃべることが出来るやうに

なったらなと夢想したことはあります。しかしそれはもう出来んことだと思ってあきらめて居ったんでありますが、たまたまその石橋先生から「来ないか」といふ手紙でございましたので、一も二もなくもう私の心は京都へ飛んでゐたわけです。

礼をつくして、改めて三高からもらひうけの手紙をいただきましたので、仙台の教室でも快くお聞き届け下さいまして、昭和二十一年の三月の末に仙台をはなれたのであります。京都へ着きましてちょっとびっくりして、しかも大変落胆したのは京都の街が、仙台の丸焼けになってサッパリしたのとはまた違った意味で、何かゴタゴタとして、しかも非常に殺伐としてをる。すなはち三高の北側一条通りの塀のそばに歩道がありましたが、そこが掘り返されて菜園になってゐる。グラウンドの周りも、また私共がよく日向ぼっこをしました中央館の南側のあの斜面になった芝生も全部野菜畑になってゐる。ネギやえんどうが植ゑてある。このネギやえんどうはその後、私が教室で独り身の生活をするやうになりますと、今日もそこら辺に来てゐるやうでありますけれども悪餓鬼共が「先生、牛肉買ってくれたら、野菜はこちらでちゃんとします」と言ひます。その頃牛肉は今の目方で言ひますと四百グラムがだいたい二百円前後だったと思ひます。現在牛肉はちょっとしたのは百グラムで八百円、千円とかいふやうな値段でありますから、いくら貨幣価値が下がったといってもですね、その頃は牛肉は割り合ひ安くて、その代り玉子が非常に高く一個二十円から二十五円したんであります。その野菜を提げて来てくれるわけで、その野菜の産地

はどこかといふと、つい目と鼻の先の三高菜園だったやうです。あれでまあ職員がよく怒らなかったもんだと思ひますが、職員はどうも三高生にその夜陰に乗じて忍び込ませるためにネギやらえんどうを作ってくれたんじゃないかと思った位であります。あの謹厳な安部晴先生なんかは教授会のはじめなどによく「今日もやられましてなあ。」と言はれるのですが、その顔がちっとも怒ってないんで、ニヤッと笑ってをられたのを覚えてをります。

さて、一番最初、何はさておいても、校長のところへ挨拶に行けと言ふので、私は石橋先生に連れられて校長官舎へ行きました。前田先生が出て見えまして、最初の御挨拶が「君も変ってるね。」といはれたんです。何が変ってるのかよくわからなかったのですけれども、あとで考へると、とにかくせっかく東北大学にちゃんとその職を得てゐるのに、高等学校の教師に成ってくることはないじゃないかといふことだったんじゃないかと思ひます。その「君も」の「も」といふ字が今日は阪倉若先生も見えてゐるので助詞の説明を承らんならんわけですけれども、この前田先生の言はれた「も」の意味ですね、だいぶん経ってから判ったんです。それは当の前田校長って方は、医学部の教授をしてをられまして、京都帝国大学の総長候補の筆頭であるといふ話だったさうであります。ところが森総さんが病気になられまして、その後釜といふことで、これまた石橋先生が前田先生を三高で一緒だったよしみで、かつぎ出しに行きまして、とうとうその総長候補が三高校長になって帰ってみえた。三高へ戻ってみえた事で、僕が変ってるなら前田先生は

もっと変ってるじゃないかといふ事に気がつきまして、「も」といふ字の意味がわかったやうな気がしたわけです。これが入学試験だったらとても合格点はもらへない。でまあ、そんなやうなことで私は宿願の三高の教師にしてもらひました。その時が三十七歳と五ヶ月でありますから、教授会に出て見てまたびっくりしました。私が三高の時に、二十年近く前になりますけど、その三高で習った先生がまだ現役で十人位おられた。山修とか深瀬とか、あるひは安部晴であるとか、古松・伊吹などみんな我々を呼びつけで呼んだ先生方ばっかりであります。ですから私と同じ位か、私より若い人といふのは加古三君とか、あるいは阪倉君とか、阪倉君は僕よりちょっと後で来たかと思ひますが、それから羽田君とか西田太一郎君とかいふやうな人が六、七人居るだけでありまして、教授会へ出ていっても若造扱ひであります。とんでもないところへ来たもんだなァといふ感じで三高の教師業といふものが始まったんであります。ところでまだ驚いたことがあった。私が初めて教授会へでましたのが二十一年の五月頃だったと思ひますが、その教授会で私を紹介されて、その後すぐ前田校長が「これから秘密会にする。」と言はれて事務職員の人達をみんな退席させまして、そして「突然だけれども私はいろいろ考へて校長を辞めることにしました。長いことご迷惑をかけて恐縮でした。」と言ひ出され、さっさと退席してしまはれた。教授会はそれで終りまして、それから生物の教室へ帰る道すがら今度は石橋先生が「前田君が辞めたんでわしも辞める。お前が来たから、ま、ええじゃろ。」かういふことで、なんと言ひますか、正に

晴天の霹靂と申すべきか、上からのつっかい棒といふのはありませんけれども、上からのつっかい棒が急にはづされたやうな感じをうけたのであります。

そこで教授会は後任の校長を探さなきゃならんことになり、何人かのお名前がでました。その中で多分ドイツ語の高安君の発案だったと思ひますが、落合さんといふ名前が出たんです。ところが聞いてみますと落合さんは甲南の校長さんになられることが内々決りかけてゐるといふ話であります。高安君はその甲南の先輩であります。どうしてそこで高安君が落合さんの名前を出したのかそれは僕等はよくは判りませんけれども、とにかく言ひ出しべェだから、君が打診して来てくれといふことになりました。これが二十一年六月頃であります。高安君が個人的に内々聞きに行ってくれたところ、落合さんもまんざらでもない顔であったといふことがわかりまして、それではといふことになりました。落合さんはその年の五月か六月に京都大学を停年になられたんでありまして、その頃京都大学の停年制といふのは、満六十歳の誕生日に退官される。現在は六十三歳の翌年の三月三十一日退官といふことになりますが、それで辞められてすぐであったので、恐らく甲南への話もちょっとした話が出たばかりだったのかもわかりません。それで三高の方がどんどん進めたわけであります。

ところがそれからの話がちょっと愉快なんでありまして、この話を生徒が聞き付けた。何かかう落合さんが校長になるかも知れんといふやうな事を聞きまして、その時に多分生徒総代かなん

かだったんじゃないかと思ひますが、萩原延寿とか、あるひは林幸正であるとか、さういった諸君が「あの人は一高の先輩である。一高の先輩が三高へ来て勤まるかどうか、ワシ等で一遍テストをしやう。」といふので、丁度その頃落合さんは東京に滞在中でありましたが、東京まで押しかけて行きまして、いろいろ話をしたらしいんです。その時には落合さんは三高へ来る事に肚を決めてをられたらしいんで、そこへ二人か三人の三高生が面会に来たとは、面接試験に来よったんだなと思はれたらしいんですけども、落合さんは「諸君といろいろと付き合いをして行く上では、モノローグではなくて、ディアローグで行かうぢゃないか」と、かういふ事を言はれた。まあとにかく相談づくで学校を運営して行かうぢゃないかといふやうな事を言はれたらしいんです。モノローグとかディアローグといふ言葉を落合さんが言はれた事に三高生が気をよくしたわけです。あれなら大丈夫だと、鬼の首でも取ったやうな顔で帰って来たのです。神陵史の中に若い卒業生の座談会があって、その処で萩原君がその経緯をしゃべってをりますが、落合さんの面接試験に行ったといふ事が生徒のイニシァティヴであったかのごとく話しているのであります。これは我々がそれを否定したり、訂正したりする気はありませんが、その前に落合さんは高安君との話し合ひで、三高へ行ってもいいといふ肚を決めてをられたのだらうと思ひます。さういふ事で生徒の方も大納得でございまして、校長更迭の正式な辞令が出たのは昭和二十一年十二月の終り頃である御用納の直前に辞令が出たと記憶して居ります。落合さんといふ人は多分に一高的なと

ころがありまして、なかなか頑固でよく言へば古武士的な風格がある人であります。しかし非常にさっぱりした人でありまして、よく怒るんでありますが後を引かない。それから議論をするとすぐに大きな声を出す人でありましたが、しかし相手が良い事を言ふなと思ふと、すぐそれに理解を示すといふやうなところがありまして、非常に付き合ひ易いタイプの先生であったやうです。で、桑原武夫先輩とかあるひは生島さんとかそれから羽田君とかいふやうな人は、これ皆フランス語系の方でありますが、これらの人が会議なんかで落合さんと議論をしますと、傍で聞いてゐるとハラハラするやうな事をお互いに言ひます。しかしすぐに治まって、また和やかになるといふやうな雰囲気の人です。相手によって好き嫌ひの強い方であったやうでありますが、それ程嫌はれるやうな教授も三高にはゐなかったと見えまして、割合に事もなく、落合さん御自身が、自分が一高出であるといふ事で、一高の欠点といふものをよく知って居りまして、三高的にならうと努力をされてゐたやうです。そのひとつとしまして、二十二年の一月に生徒の主催で落合さん歓迎会を新徳館でやった。その時に弁論部のキャップテンをやっておった倉田君が歓迎の辞を述べたのでありますが、この歓迎の辞といふのが傍で聞いてゐてハラハラするやうな事を言ったんです。「お前は一高の卒業生だから三高には向かないから、早々に荷物をまとめて帰れ」といふやうな事を、ま、かういふ、これに近いやうな事を言ったんです。で僕等も聞いてをりまして、落合さんの顔を見ていたんですけれども、落合さんは知らん顔をしてをりました。ところが、そ

れから二人が非常に肝胆相照らすやうになりまして、これは落合さんが亡くなる迄、倉田君は落合さんと非常に優れた師弟愛を保っていったやうであります。そこらの事はこれ位にしますが、さういふふうにして落合さんは、三高を辞められてからも、ますます三高的になりまして百年の全国大会（岡崎勧業館）の時も、もう八十三歳位だったと思ひますが、伊豆の隠遁地からわざわざ出て見えまして、我々と歓びを共にして下さったのであります。

◇　中山生徒課主任

私が三高に来た時に生徒課主任は中山治一君でありました。中山君は三高で私より一年か二年か下でありまして、西洋史の専門家で、講義を聞かれた諸君もかなり居るかと思ひますが、この中山君といふ人は生徒課主任としては、極めて有能な立派な人物でありました。終戦後一遍に政治形態が変り、三高なんかもいろいろなことがみんな変りました。それに乗じて一部の思想的な襲撃といひますか、啓蒙運動といふものが非常に盛んになりましたけれども、これに極めて上手に対処されて、そして中山君が辞められる迄、三高にはさして大きな波風は立たなかったのであります。後半私が生徒課をやらされまして苦労いたしたのでありますが、その話は後からする事にいたします。

中山君はいろいろと良い習慣を三高の中に残してくれてをります。何しろ終戦直後で物資不足

の折からでありました。まあ例へば学校内で紙が不足いたします。学校生活で紙が無ければ困るわけですが、ノートの紙も無ければ、試験問題を刷る紙も無い。仙花紙といふペラペラのすぐ破れるやうな紙がありまして、これはご存じの通りでありますが、これはたまたま　注（仙花紙に刷った嶽水会役員表を示して）残ってをったんでありますけれども、かういふ紙で裏にはとても字が書けない。表はツルツルしてゐますけれども、これちょっとさはるとすぐ破れるのでありまして、かういふ紙しかないわけであります。校内の試験用紙は選抜試験の答案用紙、これは非常に上質の紙を使ひましたから、これの裏を利用して、だからこれをひっくり返してみますと、――砂糖の配給は無くてもいいものかどうか――てな生物の問題が刷ってあるわけです。裏返すと英語の試験問題が刷ってあって、それが学期試験の問題である、といふやうな時でありまして、いろいろさういふ困った事でした。

そんな時でも方々で紙を上手に調達してくるやうな事をされましたり、いろいろの事をされたのでありますが、その他に生徒の方からですね、これも戦後のいはゆる民主化運動の一環としまして、今盛んにヨーロッパでやっとるやうでありますが、あれで今やられてる側の者が戦後では攻撃側になりまして、いろいろの思想運動や政治運動が日本中の学校におそってまゐりました。それに対して中山君は西洋史の先生でありますから、思想的な政治的な流れといふものについては、非常に深い学識を持ってをりまして、いくら学生が議論を持ち込んでも、到底中山君とは理

論闘争が出来ないといふ点もありまして、割合さういふ運動を企てる生徒はおとなしかったわけであります。で、騒ぎもほとんど起らない。その代り連絡会議といふものを創りまして、生徒の自治会の代表と、教授会の代表、教授会は始め五人でしたが、終いには七人位になりました。生徒の方は十五、六人出まして、定期的には月一回位やったんですけれど、必要とあれば、いつでも請求すれば召集するといふ形でした。連絡会議の中でいろいろの起っている当面の問題なんかを処理する事が出来ました。自治会側はこの連絡会議を議決機関にして、同時に執行機関にしよう、これがねらひだったわけですが、それも中山君や古松氏なんかのやうな論客には到底太刀打ちが出来なかったやうです。とにかくこの連絡会議といふものは、あくまでも生徒側と教授会との意志の疎通の機関である。これが非常に大きな一種のバッファー・リアクションをいたしまして、大きなもめごとも、起らなかったんじゃないかと思ひます。

中山君の主任の時にひとつ大きな問題がありました。進駐軍が京都にもだいぶ居りまして、GI共が三高のグランドへ来て、ソフトボールをやる。野球をしたいんでしょうが周りにまだ畑が残ってをりましたから出来なくて、ソフトボール位なら出来たんでしょう。ところがそれがだんだん嵩じて来まして、二十一年十月頃になりますと、始めはまあ夕方だけといふやうな事で使ってたのでありますが、終いには朝からグラウンドを使はせろと言ひ出したんです。そこで怒ったのは野球部であります。これも面白いんですが、野球部のその当時の教師の方は割合引っ込み思

案でありまして、生徒の方が向ふ見ずで、その時の野球部のマネージャー三人、名前言ふてもいいですが、海堀と鳥海と三輪であります。この三人が何とかして食ひ止めようといふわけで、海堀と三輪が日本文の主旨書を作りまして、それをその当時三高きっての英語使ひであると言はれた鳥海が英訳をしまして、英文の請願書と言ひますか、申し入れ書と言ひますか、それを持って府庁にありました司令部へ出かけて行ったわけであります。ところが、出て来た将校がそれを読んでえらい怒ったさうです。こちらは正々堂々と言ってゐるのに、向ふは何を生意気なといふ態度で、べらべらしゃべって怒りよる。訳わからんので、その時は鉾を収めて帰って来た。そしてこれをもっとうまく書く方法がないものかといふので、その原本を持って山修さんのお宅へ相談に行った。山修さんそれをざっと見て、「なるほどこれでは相手が怒るのは無理ないわ」といふ、まあ非常に失礼な言葉を使ってあったらしいんです。それは我々の英語力ではわからんのでありますが、山修さんがチョコチョコとその原文に手を入れて下さって、これを持って再度行ったんです。向ふから出て来るのがいつも同じ将校ではなかったのでせうが、今度の将校が割りに物わかりがよかったのかどうか知りませんけれども、「よしわかった、考へておく」といふやうな事で、その後二〜三回交渉に行ったさうでありますが、とうとう、学校の性質上とてもあれは使へんやらうといふことになって、「以後GIはあそこへは入れないから」といふ事で結着、三高のグラウンドを進駐軍から守り抜いたわけであります。

その後野球は一高戦に、二十一年には負けましたけども、二十二年、二十三年とは連勝しまして、そして四部完勝を成し遂げた大きな原動力になったといふ意味で、これは三高の歴史にとっては、ひとつのエポックになったんではなからうかと僕は思ふんであります。こんな事がいろいろとありました。

二十二年頃になりますと、学制改革といふ問題が出てまゐりまして、学校制度、あるひは教育制度改革といふ問題でありますが、文部省の中には教育制度刷新委員会（略して刷新委員会）といふものが出来まして、それに高等学校からは一高の天野校長、三高の落合校長、それの議長が東大の南原総長、その他何人かおられて、二十数人の委員会が出来たさうです。これは毎月土曜日に行はれまして、ああでもない、かうでもないといふ議論になるわけであります。教育制度改革の問題については私はアウトラインを聞いて居りますけども詳しい事はわかりません。

その京大と三高との折衝をするやうになりますのは、寮が焼けてから後でありますが、だいたい二十二年の暮頃に鳥養総長が三高へ見えまして、そして落合校長に新制をやるについてどうも三高の力を借りなきゃあならんやうに思ふ、考へてくれといふやうな話があったさうであります。落合校長はその頃刷新委員会での意見が、どういふふうに変るかわからないといふ事もありまして、はっきりとした返事はされなかったやうであります。二十二年の暮頃に刷新委員会に出て来たＣＩＥですか、ＧＨＱの教育関係の将校が、「我々は先づ軍部を解体した、続いて財閥をやっ

つけた、今度は学閥である。日本の積弊は学問系統の腐敗といふか、われわれの気に入らなかったところである。その中でも特に国立の高等学校が禍根である。なかんずくナンバースクールといふのが一番いかん。これから学制改革をやるについて、この高等学校の実質の持続、或ひは復活、もしくはその精神を教育行政の中に生かす事すら絶対に厳禁する」とかういふ事を言ったんださうであります。

これを我々が聞いたのは二十二年の十二月の終りであります。十二月の二十二日頃であります。落合さんがえらいしょげて帰って来まして、かういふ事になった、まあ、それ迄に我々もああでもない、かうでもないといふ事を言って居ったんでありますが、二十三年の一月になりましてさういふ事情をよく知った上で、合同問題を持ち出したのでせう。勿論京都大学も刷新委員会へ出て居たと思ひますが、これにGHQがですね、ナンバースクールだけを目の仇にしまして、さうして帝国大学には手をつけなかったといふのは、僕は不思議でしやうがないんであります。そこ迄手をつけたらとてもやれたものでないといふのであったのかどうか、あるいはGHQにしてみれば、高等学校を解体してしまへば大学なんかはどうでもなるといふ事だったかもしれません。さうだったとすると帝国大学は踏んだり蹴ったりの事になるわけですけども、とにかくさういふ事で一月になりますと本田といふ京大の事務局長と、学部長会議の代表といたしまして木村廉といふ医学部長、この方は大正三年に三高（医科）を出られた大先輩でをられますが、この二人で

見えて、前に鳥養総長が落合さんにそれとなく言はれた事を正式の文書にして、「京大と三高と合同で、新制を作るのに協力してほしい」といふ申し入れが正式にあったのであります。その申し入れがあったといふので、教授会を開いて、みんなで研究しておかうといふ矢先に、二十六日に自由寮が焼けたわけです。

◇　自由寮炎上

十二月の二十日頃にそれ迄にも気がついて居ったんですけども、私は京都へ来ました時に、下宿も何もないし、家もないし、たった一人でありますから、寮へ泊って居れといふので、僕は寮にもぐって居ったわけであります。宿直室といふ部屋がありまして、そこへ泊ったんでありますが、いかにも荒涼として居りますので、僕は生物学教室で椅子を四脚づつ向ひ合せに八脚並べまして、その上に布団を敷いてそこへ寝て居ったんであります。さういふ事をして居りまして、寮へはよく遊びに行ったわけです。南舎の四番に海堀が室長してをりまして、今もここに二、三人その時の室員が来てるかも知れませんが、それらの中にはなかなか快男子が揃ってゐました。いろいろと歓待されたのか冷やかされたのかわかりませんけども時々遊びに行きました。寮の玄関から南舎の方へ行く廊下のところに配電盤がありまして、その配電盤をふっと見ますと配電盤のスイッチボックスのヒューズを入れてある位置がボーと赤熱してゐるのです。おかしいなと思っ

て通ったのでありますが、昼間見ますとヒューズの入れてある遮断器の入ってゐる場所に二十番位の銅線がグルグルと巻きつけてある。ですからヒューズは飛ばないわけです。これはいかんと思ひまして中山君に言ひまして、中山君もすぐ校長のところへ行きまして校長に進言したのです。その頃生徒の方、寮生の方からも寒くてしやうがないからスチームを入れてくれないかといふ要求があったといふので、さっそく、寮の受付をしてました藤田菊蔵、通称「阿弥陀二世」でありますが、この藤田菊蔵君を喚んで、そして寮のスチームがどうなってをるかと聞いたわけです。藤田はボイラーマンの免状を持ってをるといふことでありましたが、「モーターが取りはづしてあるのでモーターの代りには手動で行かなければならないけど、ボイラーの方はちゃんと掃除さへすればいつでも焚ける。焚くのには、一番最初には一晩千斤の石炭がいるけれども二日目からは八百斤で充分だ。」と言ひました。それならちゃんとスチームが通るやうにしてもらはうじゃないかといふ話でありましたが、念の為にもう一人の谷川といふ受付に意見を聞きましたところ、谷川はこのモーターを外してあるとスチームに圧力をかけて各部屋へ送り出す。そのための圧搾ポンプのモーターだから、これがなかってはとても蒸気はまはらない。これは専門家にやらさんといかんからといふことで、あれこれしてゐるうちに、年を越したのであります。事務の方でおそらくこの交渉をしてゐるうちに、残念ながら寮が焼けたのであります。寮が焼けましたのはもちろん配電盤のところに禍根があるわけでありますけれども、直接の火元は中舎の東に南北の廊

下を隔て、隔離用の静養室といふ四畳敷位の部屋でした。その部屋は伝染病患者などが出た時にそこで静養させるので普段は使ってゐなかったのであります。ところがそこが社研かなんかの溜り場になりまして、そこの天井のソケットから蛸足配線をやりまして、二つか三つ五〇〇ワットの電熱器を使ってそれで暖をとる。普通、照明灯のキャパシティーは非常に小さいですから、オーバーロードになりまして、天井のところで火が出た、といふのが原因であるといふことであります。それで寮は一晩のうちに焼けてしまったんであります。この寮が焼けたのについては我々も責任を感じますし、とにかく我々の手当がもう少し早く出来てゐたらさういふことがなくてすんだかも知れんといふ悔いが残ります。その上一人の寮生が大事な生命を落してをるのでありまして、それと共に非常に残念で仕様がないんであります。この寮の火事のことにつきましては、これも「神陵史」にかなり詳しく、私がその原稿を書きましたので、今ここでくり返してお話するなにもありませんし、大体予定の時間が来てしまひましたので、もうそろそろ終らせていただかうと思ひますが、寮の話はこれ位にします。

寮が焼けますと方々から非常に沢山の好意のある寄附金なり、あるひは物資なりといふものが送られまして、皆さん方の御芳情の暖かさを身に泌みて感じたのでありました。一高や四高からは、沢山の義金を送って下さいましたし、その他、府や市やその他のところからも、布団とか肌着とか色々のものを贈られました。さういふものでとにかく、どうにか息をつぐことが出来るや

うになったわけです。

寮が焼けたことによって三高の教授会は強烈なショックを受けました。一月十三日か十四日の京大からの申し入れを、これは受けざるを得ないだらう、といふ弱気がわれわれを支配するに到り、二月の終りだったと思ひますが「お受けします。」といふ返事をしたのであります。それからの経緯については、三高の後身京大教養部の改革研究委員会といふものができて、その委員会に三高と京大の合同に関する交渉顚末を私がメモをひっぱり出して項目別に列記したものが残って居ります。之れは本来京大七十年史編纂委員の委嘱を受けて書いたものですが、忌諱に触れたのか、七十年史には全く取り上げてもらへなかったのであります。その没になった原稿を、戦後の三高生で教養部の教授が掘り出して来てくれまして、研究報告の中に拾録してくれてをります。この辺りの消息を今は省略さして頂きまして、興味をお持ちの方はそのプリントをご覧いただいたらいいかと思ひます。

今ひとつ忘れてならんのは、寮が焼けますと校長は進退伺を出しますし、事務局長と生徒課主任の二人は責任者としてこれまた進退伺を出しました。中山君は生徒課主任を辞めてしまったわけであります。そこで教授会では選挙の結果僕が当ってしまひました。中山君と僕とでは器量に於いても資格に於いても雲泥の相異がありまして、私は運動部の選手や応援団と歌をうたって走り廻ってる分には中山君に負けない自信はありますけれども、総ての点で不適格であるのは明白

であり、極力辞退したものの許されず、その代り教授会やその他の皆さんが一生懸命になって私をバックアップしてくれまして、そのおかげでまあ三高の最後を見送る所まで二年間私が生徒課をお預りしたわけであります。

◇　女子三高生

さて、二十二年の終り頃になりますと、「高等学校が女子学生を採らんといふのはけしからん」と再三に亘りGHQから文句が来ました。二十一年・二十二年は何のかのと言って、例へば長年に亘り男子校であったから女子向きの設備がないからとても女子を受け入れるわけにはいかない、といふ様なことを言ったり、高等学校令といふものには第一条に「高等学校に於ては、男子の高等普通教育を完成するを以って目的とする。」と書いてありまして、女子と言ふ字は入ってないんです。それに従って高等学校は皆男子校であったわけでありますが、二十三年の時には落合さんは「もう採らざるを得ないだらう。下手をすると『お前とこぶっつぶすぞ』と言いださんとも限らん。」と言ふので到頭女子も募集したのです。二十三年度は志願者が文科が一、〇三三人で理科が一、六七七人、合計二、七〇七人。その中で女子は文科が三二人、理科が二三人、合計五五名といふ志願者がありました。実際受けたのは、7％位欠席者が出ますけれども、とにかく二、五五〇人程の受験生がありまして、その中で男子に混じって入学の栄冠を得たのは女子がたった

一人であります。この女子は非常によく出来まして理科の合格者二二六名の中の大体頭から三分の一位のところの成績を収めた府立第二高女の八木貴代子といふ生徒であります。たった一人しか入らなかったのでこれではかあいさうだからといふ教授もをりましたけれども、女子の二番目が不合格の中の六十番以下にしかゐない。さうするとそれまでの男子の六十人余りをどうするか、といふ事になりますので、この女子一人になったわけであります。たった一人の女子が入ってみますと三高生は、本当に、私らもさうでありますけれども、女に弱いんであります。この女子学生は、その後新制の京大理学部へ入りまして、数学を専攻、後に、去年教養部の教授を停年で辞めた河合良一郎君の奥さんになられました。三高の女子学生が他の高等学校の方と結ばれずにすんだ、「数学に於けるユニーク・ソリューションだ」といって特に数学の先輩方は非常に喜ばれたさうであります。その奥さんになった八木女史の話をごく最近ご主人から聞いたのでありますが、三高生は女の子を敬遠して自分たちの仲間に加へなかったといふんです。現在ならばなかなかスミに置けん学生ばっかりが沢山居りますけれども、その頃の三高生は八木貴代子生徒をスミに置いておきまして、彼女から机を一列位離れて坐ったといふんです。そして碌に言葉もかけない。また、この八木さんといふ人が非常に口数の少ない人でありまして、おとなしい人であります。そんなこんなで学校生活も非常に寂しかった、といふことを河合君から聞きまして、実は四十余年後にやっと覚った次第で、本当に申し訳ないことをしたと思ふんであります。また当の八

木さんもそれから後、女学校の同窓会なんかに行っても、「あんたは三高みたいなえらい所へ入ったんやから。」と言って、今までの親しかった人まで敬遠してそばへ寄って来ない、といふので二重三重に非常に苦しい思ひをした、と。これは取り返しのつかぬ申し訳ないことをしたとお詫びしてゐます。しかし幸ひ河合君が全三高生を代表してといふとおかしな言ひ方になりますが、今は立派な家庭を築いてをられます。お子さんも三人居られて立派な家庭が出来てをりますので、これはまあ、せめてものことであります。どうか三高に対する悪い印象を払拭していただき度いものと願ひます。

それからもひとつ。学生が騒ぐ様になりますと、他の大学や専門学校の先生方が、その学生の思想攻勢に対処したり情報交換をする目的で、京都市内の大学・専門学校の学生部関係の教職員で月曜懇談会といふものができました。京都大学の松本良彦学生課長、寺尾宏二厚生課長、それからそのあと角南輔導課長などを中心に三高から中山治一生徒主任が加はり、京大と三高とが幹事校みたいな形になりまして月に一回位づつ会合を開きました。これはなかなか盛んでありまして、特に学生運動が急を告げるやうになると、この会合を頼りにする大学やなんかが出て参ります。そしていろいろと、この各大学、高等専門学校の先生方は、月曜懇談会というもので学生運動対策の基本や具体策の参考にするといふやうな事にもなったのであります。

そのころ同志社女子大の寄宿舎のことにつきまして同女子大の学生課長をやっておられたご婦

人の教授でありますが、その方が私に「私のところの寄宿生は他の大学か専門学校の学生さんがやって来てもあまり気にしない。京都大学がやって来てもどうもない。ところが三高さんがやって来ると大騒ぎになる。そして帰ってしまってからも興奮してなかなか寝つかない。何とかしてもらへませんか。」と言ふ。これは私もちょっと困りました。ところがですね、その際、私はふとむかし私が総代部屋に居った頃のことを思ひ出しました。寮で総代部屋に六人をりまして、その中の一人、私は庶務を担当してゐましたが、ある時、森外三郎校長から寮の役員が校長室へ呼び出されました。校長は一通の手紙を我々に見せられたのです。府立一女の校長さんから森（外）校長への手紙でありました。開けてみますと、「三高の寮生が深夜に下駄をはいて木造の廊下を走り廻って、大きな声で歌をうたう。これは非常に安眠妨害になる。ことに寄宿舎の生徒が、あれは三高だと言って騒いで仕様がない。これを何とか止めさせる方法はないか」とかういふ、さっきの同志社女子大の先生と同じことを、二十数年も前に既に森外校長の所へ抗議文が来てゐるわけであります。森外先生はそれを我々に読ませて「見たな。わかったな。渡したぞ。」と、かう言ふてニヤッと笑はれただけであります。止めさせろとも何とも…。こちらも「はあ、わかりました。」と言って帰って来ただけでありますが、ストームは依然としてその後も続いたやうであります。危ふく忘れるところでしたが、その同志社女子大舎監先生への返事は、「なるほど、ご尤も！　ところで、私共は校門内の出来事には絶対の責任を負ひますが、お宅の寄宿舎

でのことはお宅様で然るべくどうぞ！」と。少し虫が良すぎますかしらん。どうも三高といふところは人騒がせな学校だと見えまして、さういふことで世の中の方々に非常に迷惑をおかけしたところが多かったと思ひますけども「三高さん、三高さん」と言って、特に吉田の界隈の皆さんからは非常に大事にしていただいたのは皆さんよく御存じの通りです。

私が生徒課を預って居る間に、この二十三年の六月にゼネストがありまして、イールズなんていふのが出て来まして、わけのわからんやうな改革案を「国会で議決せよ」と言ひ出したり、藪から棒に授業料値上げを言ひ出して大騒ぎになる。さうすると全学連は六月二十四日にジェネラル・ストライキをやるといふ。これが三高の教授会でもまあいろいろと連絡会議を通じて論じられ、二十四日にやるといふことがわかったのは連絡会議でした。この中で色々我々にもらしてくれるわけです。「六月二十三日にストライキやりますからね、その日は学校どうしますか」てなことを言ってくるわけです。それが連絡会議の議題である。それが結局はこれまた教授側にも非常な知恵者が居りまして、「そんなんやったら一週間夏休みを繰り上げたらええやないか」その知恵が全国の大学、専門学校で、どこも浮かばなかったやうであります。どうしやう、どうしやうといふので大騒ぎになる。三高は秘かにそれを決めまして、「お前行って文部省の意向を聞いて来い」と、私はまあ仕方ないので夜行で行きまして、文部省へ行き、その時の大学学術局長といふのが日高第四郎先生でありました。この方は三高の教授から文部省へ戻られた方です。視学

官に大城冨士男といふよく知ってゐる我々の先輩が居られました。このお二人に会ひまして今度のストライキはどうするのか、よそはどうなってゐるといふふうに探りを入れたわけです。

ところが、文部省は「生徒に負けたらあかんぞ」といふ一点張りで、「さうですか、三高は京都はご存じの通り食糧不足でしてなあ」と言ってまあ暗に繰り上げるといふ話をチラッとほのめかしたんですけども、「学校は負けたらあかん、生徒に負けたらイカン」といふ。そして後向いてアカンアカンと言ひながら、うしろ手でヤレ！　ヤレと言ってくれるやうに僕は思った。それでそれを持って帰りまして、教授会にはかってその翌日「事情により夏休みを23日からに繰り上げる」といふ掲示を出したんです。それを生徒の方はえらい怒りまして、裏切ったとか、何とか言って、「授業をやれやれ」と集まって来るわけです。学校は休みにしたと言って掲示出してゐるのに生徒はみんなウァーとやって来て二百五十人も三百人も出て来るわけです。それでヤレ！ヤレ、授業ヤレヤレとシュプレヒコール等をやる。それでこっちはちょっとヒントを得まして、応援団長を呼びまして、応援歌の練習をやらうやないかと。そしたら又みんなやってくれ、と言ふのです。グラウンドの東側のレンガの上へ私が立ちまして、グラウンドのダイヤモンドの所へ生徒が集まりました。当時、三高の応援団は勝った時の歌は凱歌だけしか知らないんです。凱歌といふ歌は短調で歌ふので、聞いているうちに涙が出て来るやうな歌であります。もっと景気のいい歌は二つあるんですが、そのうちの一つ「征塵萬里」といふのを一つ教へておかうと思ひま

して、その征塵萬里をたたき込んだ。どうやら皆歌へるやうになって、これをもって一高戦を克ち取らうとの意気を植ゑつけたのでした。そしてとにかくその場も事無きを得たわけです。その場に集まって来たマスコミの連中が、「これ先生一体何ですか」といふから、「何ですかといふことあらへん、これはストライキでなしに同盟出校やないか」と言ったら、それを又新聞社が「三高生の同盟出校」と書いたので大笑ひになったことでありました。そんなやうなことがありました。

三高の最後は二十五年の三月三十一日の夕方から新徳館で式を始めまして、日の暮れぐれに玄関の所に集まって、あそこに嵌めてある高橋是清大先輩の書かれた「第三高等学校」の校銘板を降ろしまして、その後みんながグラウンドへ集まって最後のファイヤーストームをやりまして、かくして三高の最後はその晩の丁度十二時に校門の門標を島田先生がはずされまして、第三高等学校の歴史は永遠に終ったわけであります。この辺のことを話しますと、泣き虫の私はすぐ涙が出て来ますので、この辺で止めることにしたいと思ひます。

だらだらと一時間半余りになってしまひましたが、つまらんことをお話しまして、ご静聴頂いたことを感謝いたします。

その頃の学生は学生運動をやってゐても割合におっとりして居りました。奥田先生が京大総長の時は学生運動のセクトが10にも12にも分かれて、あっちからも、こっちからも責め立てられた

といふやうな、しかも、奥田先生の時は、学生が皆武装して居りまして、下手をすると生命の安全すら保し難いといふやうなことがあったわけです。

ところが、戦後の初め頃の学生運動といふのは、さういふことは全く無しで、極めてのん気なものでありまして、特にこれはまあ僕は三高の歴史の中で特徴の一つではないかと思ふんでありますが、学校と生徒の間に心の通ひ合ふものがあった。これは職員も同じでありまして、職員が三高生を皆自分の息子みたいに思って大事にしてくれた。その代り悪いことしたりすると真剣になって怒ったものであります。我々の生徒の頃も戦後の諸君も皆さうだと思ひますけれども、三高中で一番怖いのは門衛さんと小使さんである。その次が職員で教師は友達だとかう言ふ。教師はちょっとも怖くないんだと。只試験の済んだ後で、点をもらひに行く時だけ恐れ入ったやうな顔して行きますけれども、中には自分は大丈夫やからと思って、友達の点をもらひに行って、ついでにお前の点も見てやると言はれ、見てもらったら頼んだ生徒の方は六十何点ありまして、聞きに行ってやった方が注意点だったといふやうな笑ひ話もあったりしまして、三高生活といふものは、悲しいことの中に非常に愉快なことの連続でありました。

大分予定の時間が過ぎましたので今日はこの辺で終らして頂きたいと思ひます。

どうもありがたうございました。

（京都大学名誉教授）